

視点

子ども理解に活かす 「感覚統合」の視点

藍野大学 医療保健学部作業療法学科
作業療法士 高畑 脩平



「感覚統合」という言葉を聞いたことはありますか？
感覚統合理論は、1960年代にアメリカの作業療法士
エアーズ博士によって体系化されました。当初は学習
障害の子どもに対する治療法として開発されました
が、現在では、さまざまな発達の特性を持つ子どもた
ちへの支援や、障害の有無を問わず、子どもの発達を
理解する上で重要な視点となっています。

この理論は、保育や教育の現場で特に役立つ考え方
です。子どもの特性や行動を理解し、楽しめる遊びや
環境を提供することができるからです。

「感覚とは？」

一般的に感覚といえば「視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚」
の五感を思い浮かべるかもしれませんが、しかし、これ
に加えて「固有感覚（体の動きを感じる感覚）」と「前
庭感覚（体のバランスや加速度を感じる感覚）」の二
つがあり、合計で七つの感覚があります。

感覚の感じ方には個人差があり、大きく「過敏タイ
プ（刺激を過剰に感じる）」と「鈍感タイプ（刺激を
感じにくい）」に分かれます。例えば、ジェットコー
スターが好きで苦手な人がいるのは、前庭感覚の
過敏・鈍感の違いによるものです。同じように、静か
な環境で集中したい人と、カフェのような賑やかな場
所の方が集中しやすい人がいるのは、聴覚の過敏・鈍
感の違いによるものです。

このような感覚の違いが極端になると、園や学校生
活の中で困りごととして現れることがあります。以下
に、各感覚における過敏タイプと鈍感タイプの特徴を
整理しました。

「感覚ごとの特徴」

視覚

- ・過敏タイプ：「光がまぶしい」「人混みが苦手」「見
た目の違いに敏感」
- ・鈍感タイプ：「カラフルなものを好む」「見た目の違
いに気づかない」

聴覚

- ・過敏タイプ：「大きな音や突然の音が怖くて耳を塞
ぐ」「騒がしい環境が苦手な教室から出ていくこと
がある」
- ・鈍感タイプ：「音を出すことを好む」「音の聞き間違
いが多い」

嗅覚・味覚

- ・過敏タイプ：「香水や食べ物のおいで気分が悪く
なる」「偏食が強い」

- ・鈍感タイプ：「刺激の強い味を好む」「味の濃いもの
を好む」

触覚

- ・過敏タイプ：「手足が汚れるのを嫌がる」「人に触ら
れるのが苦手」
- ・鈍感タイプ：「汚れることを気にしない」「人や物を
頻繁に触る」「水や砂、粘土の感触を極端に好みや
められない」

固有感覚(体の動き)

- ・過敏タイプ：「姿勢を変えたがらない」「他人に体を
動かされるのが苦手」
- ・鈍感タイプ：「叩く・蹴る・噛むなどの強い刺激を
求める」「棒や傘を振り回す」「力加減が苦手」

前庭感覚(バランス・加速度)

- ・過敏タイプ：「高い場所や揺れる動きが怖い」「慎重
な動きをする」
- ・鈍感タイプ：「高い場所に登りたがる」「飛び跳ねる」
「クルクル回る」「走り回る」

「感覚の違いを理解し、適切な環境を整える」

私たち自身も、七つの感覚それぞれにおいて、過敏
な部分と鈍感な部分を持っています。これらの感覚の
違いが極端な場合、子育てや指導の中で「育てにくさ」
を感じることもあるかもしれません。しかし、最も大
切なのは「その子がどのように感じているのか」を理
解し、適した環境を整えることです。過敏タイプの子
どもは、「慣れるではなく防衛する手段を身につける」、
鈍感タイプの子どもは、「感覚をしっかりと満たす」
というのが支援の方向性になります。

感覚統合理論を活用することで、子どもたちがより
快適に過ごし、自分らしく成長できるようにサポート
していけると良いですね。

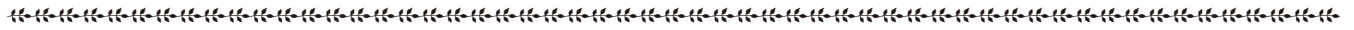


プロフィール

高畑脩平（たかはた・しゅうへい）

京都大学医学部保健学科を卒業し、作業療法士免許を取得。約20
年間、発達障害児を対象とした小児リハビリテーションに従事。
著書に「子ども理解から始める感覚統合遊び」「乳幼児期の感覚統
合遊び」など、保育・教育現場で感覚統合の視点をどのように活か
すかをテーマにしている。

NHK 子ども・子育て番組「すくすく子育て」「でこぼこポン！」な
ど出演・監修を多数行なっている。



「経営研究委員長就任にあたって」

経営研究委員会
委員長 佐々木 慈舟

この度、全日本私立幼稚園連合会経営研究委員長を再度拝命いたしました佐々木慈舟です。

加盟園皆様の現認通り幼児教育・保育業界は現在、大きな転換期を迎えています。2025年問題が現実となり、少子化の影響がより顕著になってきました。園児数の減少は各園の経営を圧迫し、財務基盤の強化と経営の効率化が喫緊の課題となっています。同時に、幼稚園教諭・保育士不足も依然として深刻な問題であり、人材の確保と育成が急務です。しかしこれは単なる脅威ではなく、自己変革と新たな価値創造のチャンスではないでしょうか。経営研究委員会では、現状分析に終始するのではなく、未来を見据えた戦略的な視点を持ち、具体的なアクションプランを提示していきたいと考えています。既に少子化の影響が養成校にまで及ぶ現下、働き方改革を推進し、魅力的な職場環境を整備することで、優秀な人材の定着を図る事が何よりの人材確保策と考えられます。

また、共働き家庭の増加や保護者のニーズの多様化に伴い、サービスの拡充と質の向上が求められていますが、これらの課題に対応するため、各園の特色「建学の精神」を活かしたブランディングと、地域のニーズに合わせた戦略的な経営計画の策定が不可欠です。さらに、業務効率化と保育の質向上を目指し、ICTの積極的な導入とDXの推進も重要な課題となっています。

経営研究委員会では、これらの課題に対するソリューションを模索し、より継続性のある園運営、具体的には、今後の人材確保方策として養成校の学生や中高生に向けて、この職の魅力を発信し、先進的な取り組みや成功事例の共有を通じて、イノベーションを促進し、業界全体の底上げを図りたく思います。

また地域社会との連携も重要な課題です。幼稚園・認定こども園が地域の子育て支援拠点としての機能を強化し、本来の幼児教育施設としての見地よりコミュニティの中心的な役割を担うことで、地域全体の教育力向上に貢献できるのではないのでしょうか。子どもたちにとってアタッチメントを含め、本当に必要な教育・保育の提供の為に経営基盤、その運営に資する情報を

発信できるような体制の構築こそが、より自園の地域での存在価値を高めていくという好循環を生み出せるのではないのでしょうか。

これらの取り組みを通じて「こどもがまんなか」の理念を実現し、子どもたちの健やかな成長を支える環境を整えると共に、ワーク・ライフ・バランス、その先にあるワーク・イン・ライフを視野に入れ、幼稚園教諭・保育士がやりがいを持って働ける環境づくりにも貢献できればと思います。

また既に使い古された感もありますがSDGsの観点からも、持続可能な幼児教育・保育施設として、エコフレンドリーな園運営やAI、IoTを活用した新しい園運営スタイルの研究も進めてまいりたく思います。

これら山積する課題に真摯に向き合い、ビジョンを持って取り組むと共に、幼児教育・保育の質を向上させ、子どもたちの健やかな成長を支える経営環境を整えることが、経営研究委員会の使命であり、そのためには業界全体でのコラボレーションとイノベーションが不可欠です。

全日私幼連経営研究委員会とは、経営的な面で皆様のアイデアや経験を集結し、シナジー効果を生み出すプラットフォームとなることが役務なのではないでしょうか。

Gérard Chaudry (ジェラルール・シャンドリ) の言葉「Ce n'est pas ce que nous avons amassé qui reste après cette vie, mais ce que nous avons donné.」この方についての詳しいことは分かりませんが、この言葉には感銘を受けました。

「一生を終えてのちに残るのは、われわれが集めたものではなく、われわれが与えたものである」

この言葉は、作家・三浦綾子氏の『続・氷点』の中で引用されていた言葉ですが、その後も心に残る名言として、多くの場で語られています。幼児教育とは未来を担う子どもたちの為に多くのものを与えることのできる仕事です。その為に私たちができることを精一杯に考えていきたいと思っています。今後とも皆様のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。